慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | フッサール晩年の遺稿における他者理論の展開 |
| Sub Title | The development of Husserl's theory of the other in his later manuscripts |
| Author | 谷, 徹(Tani, Toru) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1982 |
| Jtitle | 哲學 No.74 (1982. 5) ,p.41- 63 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | This paper attempts to elucidate some of the less known aspects of Husserl's theory of intersubjectivity. In the beginning, it is the objectivity of things that precedes intersubjectivity. But later, starting from the analysis of naturalistic objectivity, Husserl discovers the persons of the life-world (Lebenswelt). Here, it is rather intersubjectivity that has come to be the premise of objectivity, while the latter in its turn has reached its proper sense. There follow several analyses of the person in itself, among which the "Fifth Meditation" is the most systematic. Husserl, however, was dissatisfied with this work. He goes on to disclose the two-meaningness of subjectivity, and from there, through an analysis of the problem of time, comes upon the living present (lebendige Gegenwart). An absolute intersubjectivity is then reconceived as the mutual implication of world-constituting egos. Objectivity has gained a new foundation, and the problem of intersubjectivity develops into the problem of the cooperation of egos. Furthermore, it is made clear that the phenomenology which discovered this state of affairs was, in itself, motivated by intersubjectivity. Thus, the theory of intersubjectivity has found its last ground and newly oriented itself. |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000074-0041 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# フッサール晩年の遺稿における他者理論の展開

谷　徹*

# The Development of Husserl's Theory of the Other in his Later Manuscripts

*Toru Tani*

This paper attempts to elucidate some of the less known aspects of Husserl's theory of intersubjectivity. In the beginning, it is the objectivity of things that precedes intersubjectivity. But later, starting from the analysis of naturalistic objectivity, Husserl discovers the persons of the life-world (Lebenswelt). Here, it is rather intersubjectivity that has come to be the premise of objectivity, while the latter in its turn has reached its proper sense. There follow several analyses of the person in itself, among which the "Fifth Meditation" is the most systematic.

Husserl, however, was dissatisfied with this work. He goes on to disclose the two-meaningness of subjectivity, and from there, through an analysis of the problem of time, comes upon the living present (lebendige Gegenwart). An absolute intersubjectivity is then reconceived as the mutual implication of world-constituting egos. Objectivity has gained a new foundation, and the problem of intersubjectivity develops into the problem of the cooperation of egos. Furthermore, it is made clear that the phenomenology which discovered this state of affairs was, in itself, motivated by intersubjectivity. Thus, the theory of intersubjectivity has found its last ground and newly oriented itself.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻（倫理学分野）博士課程

# 序

フッサール現象学にとって他者の問題は最大のアポリアだとされている．その場合，必ず批判の標的になるのが『デカルト的省察』[1]の「第五省察」である．「第五省察」は，フッサールが生前に刊行した著作や論文等の中では唯一の体系的他者理論である．そして，フッサール自身が刊行を認めたということは，この理論に対する彼の追認をも意味するものと言ってよいだろう．このために，これまで現象学における他者問題あるいは相互主観性の問題についての議論は，「第五省察」を中心になされてきた．ところが，1973年にフッサールの遺稿群の中から相互主観性に関するものが三巻に集められて公刊されたが[2]，この遺稿集は，フッサールが「第五省察」に不満を抱き，その改訂を試みていたという事実を明らかにしたのである．この事実は，「第五省察」をフッサールにとって「完成」した理論だとする考え方に対して，異議をさしはさむ権利を与えることになった．この事実を踏まえて，私は本論文において，フッサールの遺稿をもとに，「第五省察」での理論とは異なった次元の他者理論を照らし出すことを試みようとするものである．

しかし，これらの遺稿は体系的に整理されたものではない．従って，遺稿のもつ問題性を引き出すためには準備が必要である．即ち，これまでに刊行された著作等を手掛かりにして，フッサールはどのような意味で他者を問題化したのか，また，これまでの他者理論の具体的内容はどのようなものだったのか，というような点をあらかじめ明確にすることが必要である．この準備を通じて初めて，晩年の遺稿での他者理論のもつ意味を積極的に示すことができるだろう．そこで，本論文の論述の順序は次のようにしたい．

まず，「第五省察」までの他者理論がフッサール現象学の中でもっている意味及び意図と，その具体的内容とを理解することから始めた(1-abcd).

次に，この理解に基づいて，フッサール自身が「第五省察」に対して抱いた不満を明らかにした (2—a)．それに続いて「生ける現在」の問題を経由して (2—b)，フッサール晩年の遺稿での他者理論を展開した (2—c)．これによってこれまで知られていなかったフッサールの思索が明らかになってくる．そして最後に，この他者理論を検討すると共に，それに基づいて晩年のフッサールの思索を再解釈してみた (2—d)．このことが同時に，この他者理論をフッサール現象学全体の中に再び位置づけ，また，新たに方向づけることになったはずである．

## 1．第五省察までの他者理論の道程と意味

### a．非独我論としての他者理論の出発

フッサールは1905年頃から Th. リップスの「感情移入」Einfühlung の学説を研究していたようである．これをもとに，フッサールは他者経験の研究を始めたが，その最初の成果としては，1910年から11年にかけての大学での講義「現象学の根本問題」[3]があげられる．この講義や当時の草稿を見る限りでは，相互主観性理論は最初は，単に独我論という現象学に対する非難に対抗するという動機から出発したようである．内容的には次の点が目を惹く．即ち（既に「相互主観的還元」の問題が提起されているにもかかわらず），複数の超越論的自我の間での客観性及び同時性の構成が問題にされる時に，事物 Ding や自然 Natur が客観的な指標になる，とされている点である．「現象学的還元においては，全ての事物は，感情移入された自我〔＝他者〕にとっても，その自我に属する……経験の連関やその可能性の指標なのであり，また，あらゆる自我にとってそうである．従って，自我は……相互対峙する全ての意識流を含む包括的規則にとっての指標であり，そしてとりわけ，客観的時間点であり，客観的に把握された〝同時〟である……[4]．」つまりここでは，事物や自然が前もって客観的なも

のとして与えられていて，そして，この事物や自然が指標として相互主観性を媒介する，とフッサールは考えているのである．しかし，この考えは疑問である．もしこのように事物や自然が，各々の自我を媒介する客観的指標であるならば，その時には，相互主観性は存在しなくても，あらかじめ客観性が成立していることになってしまう．この限りでは，相互主観性理論は現象学にとっては単なる Appendix であり，せいぜい独我論という非難に対抗するだけの意味しか持たず，むしろ，その失敗が現象学全体の Organismus を崩す危険さえ孕んでいる．しかし，フッサールの相互主観性理論は決してこのような意味のものではなかった．客観性の意味の内には相互主観性が含まれているのであり，従って，相互主観性こそが，事物や自然の(相互主観的)客観性を基礎づけるべきものなのである．この考え方の逆転を最も雄弁に証言しているのは『イデーン』の第二巻であろう．

b.　自然主義的客観性の超越論的前提としての他者（人格）

フッサールは『イデーン』第一巻を書いた後すぐに第二巻に着手し，1918年頃にはほぼ現在の形に完成していたにもかかわらず，その公刊を控え，手元において更に検討していたようである[(5)]．この『イデーン』第二巻がフッサールの相互主観性理論の意味を知る上で，重要な位置を占めているのである．この著作は三部から成り，それぞれの標題は，第一部「物質的自然の構成」，第二部「生命的自然の構成」，第三部「精神世界の構成」となっている．このうち前の二部は自然主義的または自然科学的態度での構成であり，最後は自然的または精神科学的態度での構成である．単純に見ると，これら三つの層はそれぞれ下位のものが上位のものを基づける fundieren という関係になるが[(6)]，しかし，ここにはフッサール自身の言う「循還[(7)]」がある．つまり，もう一面から見るならば，自然主義的態度の構成は既に自然的態度の構成を前提しているというのである．

まず，物質の構成において基礎になるのは原対象としての感覚対象であ

り，そこから出発して，物理学的な客観的事物が構成される．しかし，「物理学的事物は，それが我々と可能な交通の内にある全ての個人にとって妥当するという仕方で，相互主観的に共通なものである[8]．」「従って，原理的に言って，事物は相互主観的に同一なものであり，また……相互主観的に同一に与えられうるものなのである[9]．」このように，客観的事物の構成には，相互主観性が前提的に含まれているのである．更に，生命的自然の構成においても同様のことが言われる．「我々は独我論的経験においては，他の空間事物と同様のひとつの空間事物としての我々自身の所与性，……つまり，我々が〝自然主義的態度〟の相関者として知っているところの〝人間〟（生命的本質）という自然対象には到達しないのである[10]．」要するに，私は自分ひとりでは，自己を人間という客観的な自然対象として構成しないのである．自己を人間として構成するためには他者が必要なのである．「感情移入をもって初めて……人間という完成した統一体が構成される[11]．」ここから続いて，他者の感情移入的構成が述べられているが，本論文では省略しよう[12]．というのも，この他者構成はあくまでも自然主義的態度の問題であって，重要なのは，むしろ，自然主義的態度と自然的態度の基づけ関係だからである．そして，次のように言われる．「自然及び自然考察の分析が示すのは，この分析は補完される必要があるということ，また，この分析は自身の内に前提を隠しており，従って別の存在領域を……示しているということ，である．そして，この別の領域とは，もはや自然ではない主観性の領野である[13]．」この主観性の領野とは精神世界（生活世界）[14]である．従って，自然主義的な客観性の構成は，自然的な相互主観性を前提していることが，明らかにされたのである．

ここで，精神世界における他者経験が問題になるが，フッサールはそれを次のように述べている．「主観は，自己の環境世界の中で意識的な仕方で，単に事物ばかりでなく，他の主観をも前に見出す vorfinden．即ち，主観は他の主観を，彼らの環境世界の中で活動している人格……として見

る．この〔自然的〕態度においては，精神を身体に〝差し込むこと〟，即ち……精神を身体において基づけられたものとみなすこと，……こういったことは，主観には思いもよらない[15]．」つまり，「他者の現存在の了解的経験においては，我々は他者を直ちに人格的主観として理解する[16]」のである．この人格はまた．人格結合の中にあるとされ，そこから更に高次の社会的世界の構成が述べられていくのである．

さて，このように，自然的（生活世界的）態度においては，他者は人格として端的に経験されていることが述べられた．このような自然的な他者経験の分析はハイデッガーやレーヴィットに受け継がれていく[17]．ところが，彼らとフッサールとの間には決定的な違いがある．つまり，彼らの場合，現存在や共同人間は分析の出発点であり，他の現存在そのもの，共同人間そのものの構成は問われていない．これに対して，フッサールは，人格的他者そのものの構成を問うのである．つまり，フッサールは他者経験を間接現前作用（または付帯現前作用）Appräsentation として把えている．この作用が解明されない限り，フッサールにとって他者経験は解明されず，従って，これを前提とした客観性の構成も解明されないのである．A. シュッツはフッサールに『イデーン』第二巻を刊行しなかった理由を尋ねた時，フッサールは「その当時は相互主観性の構成という問題に対して解決を見出していなかったから[18]」と答えた，と伝えている．このフッサールの答の意味は間接現前作用という点にあるように思われる．

c.　他者経験の間接現前作用の分析の試み

フッサールにとって，他者つまり他の自我はそれ自体としては直接的には現前しない．つまり，他の自我は現示作用 Präsentation の範囲内では把えられない．更に換言すれば，フッサールにおいては知覚作用は，対象を物理的実在として把える作用，また，そのようなものとして対象を現出させる作用，つまり現在化作用 Gegenwärtigung を主に指しており，そ

の意味では，他の自我そのものは知覚されないとさえ言っても良い．フッサールは，他者経験には，このような現示作用—知覚—現在化作用の上に，もうひとつ別の作用つまり現前化作用 Vergegenwärtigung が伴っている，と考えるのである．現前化作用はそれ自体としては，想起や空想に代表されるような作用であり，対象が単に思い浮かぶ vorschweben 場合の作用である．このような現前化作用を現在化作用に基づいて統握する作用あるいは統覚する作用が，間接現前作用であり，フッサールは，他者経験をこのような間接現前作用として把えたのである．

そして，フッサールはこのような把え方で他者経験を超越論的に解明しようと試み，多くの草稿を遺している[19]．しかし，最も体系的なのは，やはり「第五省察」である．そして「第五省察」の中でも，感情移入という他者経験の超越論的理論は，単に独我論という非難に答えるだけではなくて，客観的世界の超越論的理論を基づけるものでもある[20]，と述べられている．「第五省察」の成否は別にして，少なくともフッサールがここで意図していたことだけは，先程までの文脈で明らかであろう。まさにフッサールは，客観性そのものの前提として相互主観性を認め，そして，その相互主観性そのものの構成の分析を試みたのである．

d.　第五省察での分析

ここで「第五省察」の内容を簡単に知っておく必要があるので，次にその概要を述べるが，これは一般によく知られたものでもあるので，本論文に必要な範囲内にとどめておこう．

まず「第五省察」の分析の特徴として，固有領野 Eigenssphäre への還元という手続きがあげられる．他の草稿では，本源領野 Originalsphäre，第一次本源性 primordinale Originalität，原本源性 Uroriginalität などの表現もなされているが，このような領野への還元は第一次的還元 primordi(n)ale Reduktion として総称される．具体的には，フッサールは

方法的に「最初に超越論的普遍領野の中で特別な主題的判断中止を遂行する,」つまり,「他の主観性に直接的にあるいは間接的に関係する志向性の全ての構成能作を捨象する[21]」のである．この手続きによって残された領野が固有領野だというわけである．

さて，ここからフッサールの分析を追ってみよう．我々が他者を経験する場合，根源的に与えられているのは，他の自我そのものではない．従って，ここには志向性の間接性が存している．つまり，先にも述べたように，他者経験は一種の間接現前作用なのである．そこで,「私の本源領野の中では，他者の間接現前作用は，そしてそれと共に，他者という意味は，どのように動機づけられているか」と問われる．私の第一次的な知覚領野においては，他者は物体として与えられる．その物体が身体として構成されるわけだが，そのためには，私の身体だけが身体として構成される唯一の物体なのだから，その他者の物体は「私の身体からの統覚的な移行」によって身体という意味を持つのでなければならない．そこで取り上げられるのが，私の身体物体と他者の身体物体との類似性 Ähnlichkeit である．類似性によって二つの身体物体は一対のものとして現われるのである．この作用が対化 Paarung と呼ばれる．対化においては，意味の生き生きとした相互的な呼び起こし Sich-wecken, 相互的な重ね合わせ Sich-(über) decken が生じる．こうして「今，私の身体に類似した物体が，きわだって現われてくるならば，……その物体が……私の身体から，身体という意味を直ちに受け取るに違いないことは，もはや明白と思われる[22].」もちろん，このような他者の統覚は真の意味での知覚ではなく，従って，他者の身体は私の第二の身体にはならない．しかし，他者経験は，他者の身体の振舞の知覚を伴い，それによって絶えず間接的に確証されていく．そして，これに続いて，高次の心的領域の感情移入がひき起こされていくというわけである．

ここまでで，他者そのものの超越論的構成の問題は終わっている．これ

をもとに，「私がそこにいたならば」という仕方による客観性の構成，更に，より高次の共同性の構成が述べられ，その最後には，完全な具体性における世界つまり生活世界の意味の解明にまで行きつく，とされる．これらの点はそれぞれ興味深い問題を含んでいるが，[23] その検討は別の機会に譲りたい．

さて「第五省察」では，他者の間接現前作用の解明のために第一次的還元という手続きがとられた．そして，まず知覚のレベルで，二つの身体物体の類似性に基づいて，対化作用が生じ，それによって私の自我に属するものが現前化され，他者の間接現前作用が完成されるというわけである．換言すれば，他者の間接現前作用の現前化作用は，自我の（身体の）自己構成から引き出されたことになる．このような理論に対して，これまで多くの批判がなされてきた．しかし，本論文では，フッサール自身がこの問題をどう考えていったのか，という点こそが重要である．従って，ここまでの検討の成果を踏まえた上で，「第五省察」以後のフッサールの遺稿を，次章で検討せねばならない．

## 2．第五省察以後の他者理論

### a．フッサールの不満と主観性の二義性

客観性の構成には相互主観性が前提されるという点は，まさにフッサール独特の分析であり，これによって，まず人格としての相互主観性が開示された．そして，この相互主観性を単に承認するのではなく，相互主観性そのものの構成を，間接現前作用として問題化するということも，フッサール現象学の全体的構造からして当然のことと思われる．しかし，第一次的還元という手続きは疑問である．I. ケルンは，第一次的という概念は，一方で「哲学的反省において必当然的かつ本源的に経験しうる自己固有のモナドの領野」，他方で「自然的他我経験の動機づけの基盤」という二義

性を持っている[24]，と述べている．この指摘を受けて，本論文の文脈の中では，次のように換言しよう．第一次的還元とは，一方で，反省する超越論的自我にとって自我固有のものとして経験できるはずの領野へと「戻る」ことを意味し，他方で，他者経験の大本になっている意識層へと遡っていくことを意味している．前者の場合，この手続は静態的な一種の抽象であり，後者の場合は，発生的遡及である．事実，フッサールは「第五省察」では，「ここで問題になるのは……静態的分析である」と述べたり[25]，また他方で，他者経験の根源的創設 Urstiftung への志向的遡及[26]を問題にしたりしていた．もっとも，この二義性は，素朴に考えるならば，矛盾しないように思われるかもしれない．つまり，他者経験の原受動的 urpassiv な意識が，顕在的に超越論的反省をしている自我に，最初から単純な意味で一致しているのであれば，この第一次的還元という手続きは，静態的にも，発生的にも，妥当なものであろう．ところが，事態はそれほど簡単ではない．結局，第一次的還元の意味の問題は，主観性そのものの問題なのである．そして，フッサール自身は「第五省察」以後に，現象学的還元についての再検討から出発して，主観性の二義性を見出している．「超越論的主観性への還元，これは二義的なもの zweideutig として示されるだろう．判断中止において措定可能な主観性は，〔一方で〕私のモナド的に固有な主観性，つまり現象学している自我のモナド的に固有な主観性として，〔他方で〕その主観性の中で開示される超越論的相互主観性として，理解されうるだろう[27]．」従って「私は次の区別をするべきである，即ち，〔一方で〕今，超越論的に現象学している主観性（実際のエゴ，即ちモナドとしての）と，〔他方で〕超越論的主観性そのものとを〔区別するべきである〕．後者の主観性は超越論的相互主観性として示されるのであり，超越論的に現象学している主観性は，この相互主観性を自己の内に含む[28]．」このように二つの主観性が区別された後，更に続けられる．「更に，今，超越論的に現象学している主観性としてのエゴは，自己自身をその過去性

について認識するが，その過去性においてはこの主観性は，超越論的に現象学していない主観性だったが，しかしそれでも超越論的主観性であった．そして，この主観性は，同様に，その超越論的他者経験においては，他のエゴ達を，現象学していないエゴ達（時によってはそうしていることもあるが）として，しかし超越論的エゴ達として，認識する．」このようにここでは，超越論的相互主観性は基本的に，現象学していない主観性の次元のものなのである．そして同時に，他者もこの次元では，本来的には，現象学していない超越論的エゴ達として示されている．とすれば，相互主観性の問題は，本来それが成立している意識次元，つまり現象学していない主観性の次元へと連れ戻されなければならないだろう．事実，フッサールはこれを後に究極的還元 letzte Reduktion と呼んで，その遂行を試みている．その際，先時間的自我が開示されるのだが，ここでは，「第五省察」での自我は時間的自我であり[29]，それが矛盾を生んだことだけを指摘しておこう．いずれにせよ，フッサールは，これまでは主観性の二義性を混同していたが，ここで，このことに気付いたのである．そして，この自覚に基づいて，相互主観性の問題を，現象学していない主観性の次元に移し，その発生的遡及的分析を試みていくのである．

しかし，相互主観性の問題をこのように把え直す時，次の問題が生じてくる．つまり，現象学していない主観性はそれ自体としてはどのようなものか，また，この主観性はどのようにして反省されるのか，また，現象学していない主観性の次元での相互主観性はどのようなものか，こういった問題が生じてくる．これらの問題は互いに深く関係しており，それも，時間性の問題を媒介にして関係しているのである．フッサールは，「第五省察」以後の相互主観性理論を，生ける現在 lebendige Gegenwart の問題と絡めて展開しており，従って，これらの問題の答は，この時間論を通じて探されねばならない．それ故，この時間論を次に取り上げておくことが必要である．

b. 生ける現在の問題

フッサールは1930年頃から35年頃にかけて，時間性に関する草稿群を遺している．それらは，相互主観性の問題を考える上で不可欠であり，事実，『相互主観性の現象学』の中にもその一部が収められている．また幾つかの研究書にも引用されているが，しかし，大半は公刊されていない．従って，その直接的研究はできないが，本論文では，K．ヘルトの優れた研究書『生ける現在』[30]を中心に，この時間論の概要を把えておけば，相互主観性に関する遺稿の理解には十分であろう．

まず第一に，生ける現在は，時間的意識流としての超越論的自我(「第五省察」での自我）とは区別された根源的自我である．この自我は，流れつつあるが，しかし，それ自身は時間の中にはない．「自我は，その最も根源的な根源性においては時間の中にはない．」[31] むしろ，生ける現在は，自己を時間化していくものであり，時間的自我に対して，原受動的，先時間的 vorzeitlich な機能現在 Funktionsgegenwart，あるいは，そのような〝我作動す〟ich fungiere である．それ故，「生きて動いている私の現在，原様態における私の現在は……原時間的超時間的時間性 urzeitliche überzeitliche Zeitlichkeit」[32] だというようにも言われる，第二に，生ける現在は，流れ去ることによって，自己自身からの距離 Abstand をとっている．しかし，これは完全な自己分離，分裂を意味しない．つまり，生ける現在は，「根源的に一致している」ureinig sein[33] ものとしての自我でもある．こうして，生ける現在においては，自己からの距離と自己の総合とが生じており，その意味で，流れの中に立ち止まり性 Ständigkeit が存する．それ故，生ける現在は，流れつつ立ち止まる現在という両義的な事態だとされるのである．そして，このことと密接に関連して，第三に，生ける現在は，流れることにおいて匿名的に作動しているが，但し，この匿名性は全面的なものではない．もし，生ける現在が（先時間的に）全面的に

匿名的であったら，およそ自我反省などは意味を持たないだろう．ヘルトに依れば，「だから，根源的現象の匿名性は，それ自身なお何か知られたもの etwas Gewußtes なのである．」[34]

このように主観性の原様態が把えられるならば，他者問題は原理的には解決されている．生ける現在が匿名的に流れる限り，その〝唯一性〟Einzigkeit は「〝数的に単一〟を意味しない．換言すれば，それは独我論的に理解される必要はない．」[35] むしろ「自我の唯一性は，それ自身において，まさに他の同じく唯一な究極的に作動する自我の可能性を示すような種類のもの」[35]であり，また，先時間的機能現在は「他の同じく唯一な自我現在を排除しはしない」[36]はずである．この引用はヘルトのものだが，本論文では，このような可能性をフッサールがどのように考えていたかが問題である．それを次に検討しよう．

c.　生ける現在と相互主観性

ここでは，フッサール自身の言葉を検証するために，ひとつの注目すべき草稿[37]に視点を定めて，少し詳しく見ていこう．

フッサールはここでも，先に述べたような相互主観的客観性の考察から出発する．「私の第一次的身体の全ての変化は，全ての他者にとっても現存し，そして，私が引き起こす外的事物の変化は（例え，それ自体から生じても），相互主観的に存在している．」従って，「同じものとしての相互主観的自然の統一」が構成されており，その構成される仕方が解明されねばならない．

そこで，他者の与えられ方に注目すると，「他者は，私にとって知覚的に現存し，そして同時に，私を知覚するものとして現存」している．つまり，「私は他者を前もって，まさに他の自我として理解している」のである．このように言うと，子供時代の母子間の生物物理学的，心理学的な交流関係が問題であるかのように思われるかもしれない．しかし，この統覚

の全体は「純粋に私の主観的統覚的生の事柄」であって，それ故，私は，超越論的現象学的態度及び方法へと向かうことになる．この時，私の心的内在は超越論的内在に変わり，また，私の内的心的発展も同様である．つまり，現象学的態度においては，「私の超越論的現在の中には，私の超越論的過去そして私の超越論的子供存在の全ての段階が，その都度相関的に構成された私の〝世界〟と共に，含まれている」のである．

しかし，まさにこの時，超越論的時間性の問題が生じてくる．「もし，私が，現在，過去——時間様態について語るならば，私は未だ究極的な超越論的なものの中にはいない．」先にも述べたように，究極的なのは生ける現在であり，つまり「絶対的に超越論的な自我の原的 urtümlich な生，絶対的に根源的に流れる生である．流れるとか生（きる）ということは，ここでは厳格な意味で理解されるべきではない．……それは，時間化するということにおける原存在であり，また，時間性の中に入って行く原能動性であり，そしてまた，時間化された時間の流れの中でさえ，既に多数性 Vielheit として，また，既に自己同一化 Identifikation として，相方の作用の同一性 Dieselbigkeit である．」流れることは，このような原時間化なのである．これに対して，「超越論的分析とは，諸々の内包 Implikationen を展開することである．つまり，反省しつつ分析する自我は，流れることの内に自己の先存在を持っているのだが……，この自我に対して……内包された発生として現われてくる諸々の内包を展開することである．」このように，超越論的分析（あるいは現象学している主観性）は，生ける現在の内包を開示しようとするものであるが，これは決して簡単なことではない．確かに「私は，反省することによって，流れることを素早く把む erhaschen．」しかし，この時，既に私は，反省的に自己同一化しており，従って，生ける現在において遂行された時間化の後を追っており，結局，再想起の生を生きていることになる．そこで次のように言われるのである．「いかにも，生は能動的な生である．しかし，素朴性の最後

の克服は，まさに流れることへと遡って見ること，そして，全ての能動性を禁止することである.」というのも「能動性は，その主題を持ち，その自己同一化的な反復作用 etc. を持ち，そして，自己の背後に生の環境を持っているが，この環境は，この能動性の中では見えない」からである．従って，「素朴性の克服の方法，それは究極的還元である．つまり，この還元は，絶対的な原的な生へ，原的な我在りへ，流れることへ，原受動的な流れることへ，我為す，我自己同一化する etc. へ，見る眼差しを向けるのであるが，しかし，流れることにおいて流れ去るものとして，そうするのである――またそこから，同一なものへ，全ての段階における〝形成物〟へ，眼差しを向けるのであるが，流れることの内に内包された能力性，つまり自己同一化的な為す etc. という能力性として，そうするのである.」このように，究極的還元は，生ける現在の両義性に基づいて，この両方の事象に眼差しを向けるのである．しかも，究極的還元は，もはや一回的な単純なものではない．確かに，私は，流れることへと自分を向けることができるが，しかし，それは，先にも述べたように，常に後から来る自己同一化作用（これは流れることにおいては前もって統一なのだが）によって，だからである．このような困難な還元を，フッサールは遂行する．「しかし，今，私はこの還元を行う．つまり，今，私は現象学する能動性を遂行し，現象学的にかくかくの確定を行ない，そして，私は事象を横たわらせる．そして，明日，私は再び現象学を継続し，そして，継承性 Traditionalität から，私にとって統一的に更に継承される理論を獲得する．そして，そのことを私は，他者に対して行ない，そして……他者を伴った共同性の中で行なう.」

ここでは，昨日の原的現在と今日の原的現在といった区別は不要である．というのも，昨日とか今日とかが問題になるのは，まさに究極的な原的自我つまり生ける現在においてだからである．従って，この「原的に生ける現在」は「確かに既に，自己の内に，〔自己の〕志向的変様を担ってい

る.」しかも,「世界を持つものとして,この自我は,……想起の自我や未来の自我〔=自己の志向的変様〕と同様に,自分の仲間達 Genossen を持っている.従って,この自我は,他者と共に共同性の内にある自我 etc. である.」

しかしこの時,自我とかエゴという表現には気をつけねばならない.「……原的な生の原的な自我は,他者に対する意味でのエゴとしての自己固有の存在を,自己の内に内包されたものとして持っており,従って,他者の感情移入的存在を,自己の内に内包されたものとして持っている.しかし,その他者は,自我の固有性の中に含まれているのではなくて,原的現在の自我としての自我の絶対的存在の中に含まれているのだ.」要するに,ここには,自我とかエゴという表現に両義性がある.その一方は,全てを含む絶対者としての自我であり,他方は,他者に対するものとしての自我である.そして,前者の自我が,他者をも含む,というのである.従って,「もし,現象学においてまず最初に,還元が行き着く自我の表現として,我思うということが言われるならば,それは両義的なもの aequivocum[38] であり,しかも,絶対的に必当然的な両義性をもった出発点である.というのも,原的な流れることの自我が,絶対的な自我であり,従って,この自我が,固有の自我としての自我と,固有の自我の志向的変様としての他の自我とを,自己の内に担っている,ということは後になって初めて明白になりうるからである.」従って,全てを担うものとしての原的エゴは,「それにとって他のエゴは無意味だから,誤ってエゴと呼ばれている.」

そして,この意味での原的エゴが「本来的意味でのエゴ達,つまり,互いに対して他者 alteri であるエゴ達を,自己の内に担っている.また,私は,第一次的自我の意味で唯一の自我であるが,この意味での唯一の自我をも,原的エゴは,自己の内に担っている(ここでは感情移入が計算に入れられている).つまり,私は,絶対的に具体的な自我から,私にとっ

て存在する多くの自我を，獲得する．即ち，第一の作動している自我として私の〝固有の〟自我を，また，そこから他の自我を，獲得するのである．」ここで獲得されるのは，（時間化されたものとしての）モナドの共同性である．しかし，それだけではない，つまり，モナド的な他者は，未だ究極的な原的エゴとしての他者ではない．しかし，ここには，他者が，自己の原的エゴ性に至りうるものであることが，内包されているのである．その時，次のように言われる．「従って，その時，私は次の事柄に戻る．即ち，私の原的エゴは，原的エゴ達の〝無限性〟を内包しているが，他方，その各々のエゴも，他のエゴ達を内包しており，それも，自分からまさにこの無限性を内包している．従って，そこでは，私のエゴさえもが，各々のエゴの中に内包されるというようにして，全てを内包する私のエゴまでもが，内包されている．考えうる意味で全ての存在者は，私の内にある――それも，目的論的調和をもって，私の内にあり，この調和が，全体統一性としての全体性を可能にしている．しかし，全ての他者は，その無限性の総体性において，私の中に存しており，それも，全ての意味での存在者を自己の内に内包するものとして，私の中に存している――そこでは各々が私に対等である．」

この遺稿での分析には幾つかの特徴がある．まず，出発点はやはり客観性の相互主観的構成の問題である．そして，ここでは明確な自覚をもって，他者経験の発生的分析，それも，超越論的発生的分析が試みられる．その時，超越論的な時間性の問題が生じてくる．そして，生ける現在の内包を展開するために，究極的還元という方法がとられるのである．（この還元自体が極めて重要な問題であり，更に検討が必要だが，その余裕はない．ここでは，フッサールの考えを示しただけで満足しよう．）この時，この還元の自我（生ける現在）は，既に共同性の内にある．しかし，この自我とかエゴという表現は両義的である．つまり，全てを含む絶対者として

の原的エゴと，他者に対する意味でのエゴである．そして，生ける現在の原的エゴは，後者の意味での他のエゴだけでなく，他の原的エゴをも含むのである．その場合，他の原的エゴも絶対者である限り，そこには私も含まれる．従って，ここでは，「絶対者の相互内在」あるいは原的エゴの相互内包関係が認められたわけである．[39] I．ケルンによれば，「他者の構成とは……私自身を〝対等に〟構成するラディカルな超越者の構成である．構成するものと構成されるものとの内包関係が，ここにはあり，そして，ここにおいてのみ相互的である．[40]」このような相互内在において初めて，絶対的世界構成者の複数性，つまり，真の超越論的相互主観性が成立し，これと共に，相互主観的客観性が成立するのである．

d. 検　討

以上のように見てくる時，フッサールにとって他者問題は，他者を時間的自我の中で主題的に再構成するという「第五省察」で試みたようなものではなかったように思われる．むしろ重要なのは，他者経験の超越論的発生的分析を遂行して(究極的還元によって)，生ける現在の次元で，絶対者としての自我と他者との相互的な構成関係の成立の可能性を探ることであったように思われる．この相互的構成と共に，相互主観的客観性の構成が可能になるのである．

そして，このことから逆に，これまでのフッサールの思索の意味が，更によく理解されるだろう．まず，フッサールは，客観性の前提として，既に『イデーン』第二巻で，自然的態度における他者（人格）の先所与的存在を認めながら，それに満足しなかったが，その理由も，新たに照らし出される．他者の間接現前作用を問題にするということの内には，単に構成されたものとしての他者を見出すだけでなく，絶対的に構成するものとしての他者の可能性を残すということが，含まれていたのである．確かに，その後のフッサールは，「第五省察」で，他者の間接現前作用を，時間的

自我の自己構成から主題的に派生させようとした．しかし，そのようにすることは，構成するものとしての主観性の感情移入にはならない．つまり，構成されたもの（それが身体であれ，より高次の心的領域のものであれ）を，他者に移入することになってしまう[41]．あるいは，うまくいっても，先程まで構成していたものを，他者に移入することになってしまう．結局，「第五省察」での感情移入は，時間化された相互主観性（つまり，先の遺稿におけるモナドの共同性）の構成にすぎない．このような相互主観性は，客観性の前提にはなりえないのである．ところが，他者経験を生ける現在に置き戻すならば，事情は大きく変わる．ここでは，先時間的な意味で，自我の先存在が相互主観性であることの開示が，重要なのである．もはや，この先時間的相互主観性を，時間的自我から派生させることは無意味であろう．むしろ，この相互主観性が先時間的なものであるということの内には，その各々の他者が，自己を時間化していくものであること，それ故，絶対的に世界を構成していくものであることが，含まれているのである．つまり，この先時間的意識次元で初めて，対等に世界を構成する「等根源的パートナー[42]」が見出され，それと共に，世界の客観性の相互主観的構成も，可能になったのである[43]．先の遺稿で，フッサールが確認したのは，まさにこのことであった．

さて，ここから，相互主観性理論は更に展開する．生ける現在の相互主観性が見出された限り，その相互主観的構成能作が，積極的に取り上げられねばならない．つまり，(かつての表現を転用すれば)生ける現在の相互主観性への還元，あるいは究極的相互主観的還元によって，その構成能作を解明し，そして，そのような共同構成論として，相互主観性理論を把え直さねばならない．そして事実，フッサールは，この方位へと歩を進めていたように思われる．そこで注意を惹くのが，目的論 Teleologie の問題と社会構成の問題だが，本論文では，『危機書[44]』での目的論の問題を一瞥

するにとどめよう．それだけでも，相互主観性理論が，現象学全体の中に深く根をおろしていることが，確認できるだろう．

『危機』においては，哲学は，究極的創設 Endstiftung によって課せられた理性という課題を担っており，これが，現象学そのものを動機づけている，とされる．とすれば，現象学的哲学は，超越論的な意味で，歴史的，相互主観的に動機づけられていることになる．そして，現象学的哲学それ自身が，このことを見出すのである．「……絶対的理性の担い手としての哲学するエゴ，それは……その共同主観や全ての共同哲学者を含んでいるエゴであるが，このエゴの最も深く最も普遍的な自己理解の哲学が始まる．それは……絶対的な相互主観性（世界の中では全人類として客観化されている）の発見であり，そしてまた，絶えざる〝世界構成〟という超越論的生における絶対的な（究極的意味で超越論的な）主観性の必然的で具体的な存在様式の発見である……(45)．」このような論述の中で，現象学全体と相互主観性理論との最終的な関係が見出される．つまり，この「哲学するエゴ」が「理性」において，相互主観的に動機づけられているとすれば，それは，先の遺稿で見出されたように，「哲学するエゴ」が，「流れることの内に自己の先存在を持ち」，しかも，その先存在において，既に相互主観性であるからである．そしてまた，この「哲学するエゴ」が自己の究極的次元において，「必然的で具体的な存在様式」として（先の遺稿の意味での）「絶対的な相互主観性」を発見するのである．ここにおいて，現象学は，このような仕方で目的論を担った共同構成論であることを自己確認したのである．この意味で，現象学は，それ自体，相互主観性の現象学として理解されるだろう．そして，まさにこの時，相互主観性理論は，現象学の中で最終的な位置を獲得し，また，新たに方向づけられたのである．

## 結

本論文は，「第五省察」をフッサールにとって完成した理論だとする考

え方に対して，彼の晩年の遺稿での他者理論を提示し，その意味を検討することを試みた．そのために，まず，これまでの著作から，彼の他者理論のもつ問題を引き出し，次に，遺稿の中で，彼がそれらの点を，どのように考え直していったかを明らかにしようと試みた．そして最後に，彼の他者理論を，現象学全体の中で位置づけ直したのである．

## 注

(1) Husserliana, Bd. I, Nijhoff, Haag, (1950)
(2) Hu. Bd. XIII, XIV, XV, (1973)
(3) Hu. Bd. XIII, Text. Nr. 6, (1910/11)
(4) ibid. S. 191
(5) Hu. Bd. IV　M. Biemel の序文参照．なお本書については，細川亮一「現象学の再検討」『現象学特集』情況出版，参照．
(6) Hu. Bd. III, S. 374-375 参照．
(7) Hu. Bd. IV, S. 80, S. 210
(8) ibid. S. 87
(9) ibid. S. 88
(10) ibid. S. 161
(11) ibid. S. 167
(12) Merleau-Ponty, M. "Le philosophe et son ombre", dans "Eloge de la philosophie" 参照，但し，メルロ=ポンティは，独自の解釈を行ない，自然主義的構成であることを無視している．
(13) Hu. Bd. IV, S. 172
(14) 用語上も生活世界 Lebenswelt の語が使われている (ibid. S. 288, Anmerkung)．なお，自然主義的客観性の超越論的前提としての自然的相互主観性という場合，一定の補足が必要である．客観性は，自然主義的なものだけでなく，自然的，生活世界的な客観性も認められるべきであり，事実，フッサール自身も，そのような言い方をしている．しかし，自然的客観性の先世界的 vorweltlich な前提としての相互主観性という要求（トイニッセン）は，フッサールにおいては，後に，先時間的という仕方で，一挙に解決されるので，ここでは敢えて問題にはしない．
(15) idid. S. 190
(16) ibid. S. 191

(17) Heidegger, M. "Sein und Zeit," Löwith, K. "Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen,"

(18) Schütz, A. "Collected Papers I", p. 140

(19) Hu. Bd. XIV, 特に Sektion III が重要である.

(20) Hu. Bd. I, §43 参照.

(21) ibid. S. 124

(22) ibid. S. 143

(23) より高次の共同性の構成に関しては『イデーン』第二巻の他に,「共通精神」(Hu. Bd. XIV) や「伝達の現象学」更には居住世界等に関する草稿 (Hu. Bd. XV) 参照.

(24) Hu. Bd. XV, 編者序文 XIX

(25) Hu. Bd. I, S. 136

(26) ibid. S. 141

(27) Hu. Bd. XV, S. 73

(28) ibid. S. 74, 75

(29) 「第五省察」では主観性の二義性が見出されていない限り,先時間的自我も見出されていない. 従って,「第五省察」での自我は時間的なものである.

(30) Held, K. "Lebendige Gegenwart" ヘルトも,この著作の中で他者の問題にも言及しているが,しかし,彼自身の見解は,"Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie": in "Perspektiven traszendental-phänomenologischer Forschung" に詳しい.

(31) Ms. $C_{10}$ S. 21 (1931) Held, L. G. S. 117

(32) Ms. $C_2$Ⅲ S. 8-9 (1932) Tháo, T. D. "Phénoménologie et Matérialisme Dialectique": p. 141

(33) Ms. $AV_5$ (1933) Held, L. G. S. 106

(34) Held, L. G. S. 122

(34) Held, L. G. S. 122 さらにこのことは生ける現在の反省可能性の問題を示している. というのも「反省において反省された極は生き生きとした (究極的に作動している) 極ではない」(Ms. $AV_5$, S. 2) からである. 本論文では,フッサールが究極的還元という方法を考えていたことを指摘するにとどめ,この問題は別の機会に譲りたい.

(35) ibid. S. 161

(36) ibid. S. 162

(37) Hu. Bd. XV, Text. Nr. 33, "Ein Nachtgespräch" 新田義弘「フッサー

ルの『或る夜の対話』草稿をめぐって」『現象学特集』他参照.

(38) この両義性は，本論文2—aで述べた主観性の二義性とは（密接に関係しながらも）別の事態である．ここでは現象学していない主観性の次元で，自我が両義的に作動している．従って，この事態は，生ける現在の多数性と自己同一化という論点と相即的に把えられるべきであろう．尚，一言付しておけば，絶対的に原的なエゴと，他者に対する意味でのエゴとは，この両義性においても，やはり同一 identisch なエゴでなければならない．この両義的な自我の同一性こそが，現象学を，具体的超越論（先験）主義あるいは超越論的実証主義として支える基盤である．しかし，この問題も別の機会に譲らねばならない.

(39) 従って，ここでは先時間的次元で，世界を構成する主観性の複数性が成立している．つまり，生ける現在は，既に，相互主観性である．但し，この「既に」という言葉は，超越論的反省に対しての言葉であり，従って，この反省そのものが，更に問われねばならないが，先にも断わったように，この問題は別の機会に譲りたい.

(40) Hu. Bd. Xv, 編者序文 LXIX

(41) 湯浅慎一『知覚と身体の現象学』太陽出版，参照

(42) Theunissen, M. "Der Andere", 2. Aufl. de Gruyter, Berlin, (1977)

(43) 但しこの場合，他者は，(生ける現在の自我と同様に)匿名的なもの，あるいは，ヘルトの言葉を借りれば，「原理的に非主題的にとどまる作動す Fungieren」(P. t. F. S. 53) だということになるはずである．しかし，フッサールは常に，この「作動す」を主題的に把えようとしていた．そのため，遺稿でも，自我の自己疎外 Selbstentfremdung ということを述べ，これが更に，『危機』での脱他化作用 Ent-fremdung の理論に継がる．しかし，例えこのような仕方で感情移入がなされるにしても，それは決して，反省する自我にとって，直観的に把えられるわけではないだろう．とすれば，この理論は，単なる（極く単純な意味での）比喩以上のものではないことになる．これ以上に問いを進めるには，超越論的反省そのものを問い直すことが必要なのである．しかし，本論文の立場では，生ける現在の相互主観性の発見によって，他者問題は本質的に変化したのであり，むしろ，重要なのは，共同構成の問題だと思われる。

(44) Hu. Bd. VI, (1954)

(45) ibid. S. 275 但し，当該箇所は，『危機』編者によって Ms. $\mathrm{III}_6$ から採られたものである．尚，新田義弘『現象学』岩波，参照.